

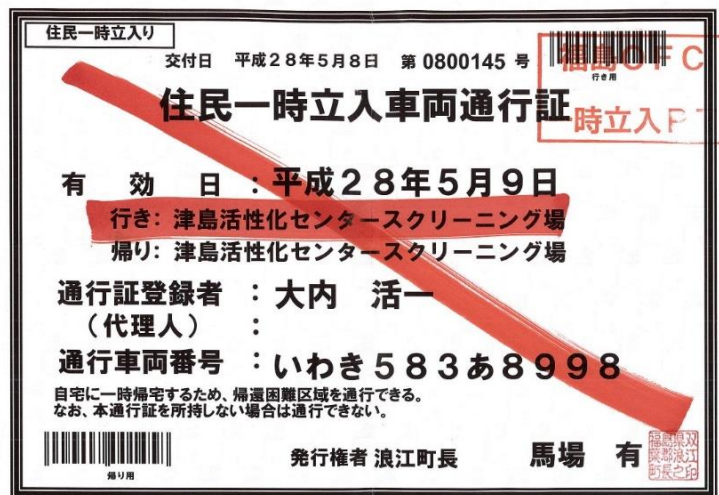
『NPO花見山を守る会』を訪ねて

2016年5月9日

5月9日東京駅から8時48分福島駅着の「やまびこ123号」で「にほんごの会」の遠藤織枝、木村徳子、杉田志津子の3人は一年ぶりに「NPO花見山を守る会」を訪ねた。この会の代表高橋真一さんは熊本・大分の復興支援活動に行かれていて、今年も去年と同様、宗形幸栄さんと大内活一さんのお世話になった。去年は主として居住地と田畑などの除染の状況を見て回ったが、今回は帰還困難区域の浪江町を案内してもらおうことと、「花見山を守る会」の事務所2階で行われている「小高会手芸グループ」に参加させてもらうことになっていた。

10時前にガイガーカウンターを握りしめ、国道114号線富岡街道を川俣町に向けて出発。去年立ち入りを許可されなかった浪江町の入り口で、事前に届け出ておいた氏名・身分証明書

を本人と見比べ、写真とともに「浪江町津島活性化センター」に立ち寄り、部外者に対する検査を受けることになる。車のフロントガラスにA4用紙大の通行証を立て掛け、この地域を一巡して検問所に戻るまでは外から見えるようにしておかなければならない。「住民一時立入車両通行証 津島活性化センタースクリーニング場」というこの通行証には、「自宅に一時帰宅するため帰還困難区域を通行できる。なお、本通行証を所持しない場合は通行できない」と書かれている。



本通行証を所持しない場合は通行できない」と書かれている。ここでそれぞれが小型の放射線線量計を首から下げてもらい、白い防護カッター式が渡される。着用を強制されることはなかった。お持ち帰りくださってもいいですよ、とのことだったので「記念品」として持ち帰らせてもらった。みだりに車外へ出ないようにとの注意も受けた。

それから2時間半にわたって大内さんが運転しながら、詳しい説明をしてくださった。この津島地区は大内さんの地元であり、大内さんの家がある。ゆるく蛇行して続く山里には両側に、ぽつんぽつんと、立派な、十分住める家が並び、また通行止めの個所などもある。浪江町から飯舘村へと続くこの山間を、最も高濃度な放射線の帯が通り抜けたため、原発事故以来5年が経過した現在も帰還困難区域のまま。放置された田畑には柳の木が鬱蒼と生い茂り、湿地帯は葦に埋れている。離れたところには無人の集落と隣り合った墓地がある。盆やお彼岸には、この地を離れた人たちが大勢墓参りにやって来る。その時ですら通行証を請求しなくてはならず、また同時に来る人数も制限されるという。墓石の産地



で有名なこの辺り、墓地は陽に反射して遠目にも新しいもののように光って見える。わずかにあるビニールハウスはトルコ桔梗を栽培している。花は食べ物ではないから放射能の問題が少ないのだそうだ。通行証を持って、限られた時間内に花の手入れに通う。

小高いところにポツンと建っている大内さんの家。

内部は新築したばかりと思えるほどピカピカだ。居住が許されない現在、たまに許可を得て、家の中を磨きに来るといふ。「居住が可能になったら、帰って来られますか」と聞くと、「夫婦二人だけで生活できると思いますか」との答え。隣近所に人が住み、村や町があつて、はじめて成り立つのが生

活というものだ。当たり前のことを忘れて質問した自分が恥ずかしかつた。家の周囲には、藤、山吹、つつじ、山桜、大手毬などが咲き乱れている。玄関の前からは阿武隈山地で2番目に高い天王山のなだらかな稜線が見える。だが、足元からは猪が掘つて荒らした凸凹の山肌が續く。丈高い草に覆われてしまった広い葉煙草の畑、タバコを乾燥させた小屋、大きな漬物樽が転がる物置小屋、広い車庫。すべて5年前のままで、大内さんの仕事場は荒れ放題だ。この穏やかな山里で生きてきた人々の生きざまを見た思いだ。

朽ちかけた屋根と柱だけ残した大きな牛舎が二棟並んだ高みに登つた。見上げる空はあくまで碧い。「ここは放射線量が一番高いところ」と大内さんが言う間もなく、手持ちのガイガーカウンターが鋭い響きを發した。見ると、表示が「5マイクロベルト」になっていた。草原での放牧とは違つて、日々、牛舎まで3度の食餌を与えに登つてきた人たちと被曝後の牛たちのことが思われた。道端に立つモニタリングポストの数字を読みながら山の中を一巡し、浪江町津島活性化センターに戻つた。再度本人確認と靴底の放射線量検査。首から下げた線量計の値を点検する。全員「1マイクロベルト」。

浪江町を出て福島市方面へ。去年、至る所で見つ黒なビニール袋（トンパック）を積み上げた山はかなり減つていた。仮置き場に運び、集めているようだが、まだ処分場は決まつていない。敷地の広い家では仕方なく、庭に埋めているところもあるとか。

田畑や居住地帯優先の除染はほぼ終わつて、今は主体は道路の除染に移つたそうだ。時間が経過するにつれて、地域全体の放射線量は少しずつ減つてきてはいるようだが…。

つらいところばかりお見せしましたからと、大内さんは二本松市羽山の里のクマガイソウ祭りにつれて行つてくださった。野生のクマガイソウが一万株以上も広がる群生地、眼をみはるばかりだつた。

☆☆☆

小高会手芸グループ。毎週月曜 10 時から 3 時まで、「花見山を守る会」の建物の 2 階に集まって、めいめいが好きな手芸をしている。この日は 8 名の女性たちが、前の日まで開かれていた「桜まつり」に出店した製品でかなりの収益があった、と楽しそうにしゃべりながら手を動かしていた。みなさん、福島市の人たちだったが、この会に集まった経緯などを話してもらった。

被災後、若い人たちはよその土地へ移って行き、幼い孫たちの世話をすることもなくなった。農業もやれず、何もすることのないやりきれない日常が続く。途方に暮れていた矢先、「花見山を守る会」がこの場所を提供してくれた。仲間ができ、悩み事も打ち明けられる。お茶を飲みながら好きな手仕事もできる。大きな声で笑えるだけでもうれしい。だんだん元気になり週一回の集まりが待ち遠しい。

机の上にいろいろな作品が並んでいる。合作だろうか、大きなバッグは何でも入りそうだ。部屋の隅に置くだけで辺りが明るくなるような配色だ。ポーチ、ティッシュケース、アクセサリなどを披露してくれる。これからどのようなものを作るつもりか聞いて見た。衣類、和服の端切れ、帯、なんでも材料さえあれば、みんなで知恵を出し合って作ってみる、と意欲的な返事。製品を送ってもらえれば、「にほんごの会」ではメンバーが手分けして販路も探せますよ、と話しがはずむ。みなさん、これまではコミュニケーションの場を持ったことがなかったと、この日の交流をたいそう喜んでくれた。本が入る厚手の袋類も欲しいとか、A4 の書類が入る大きさのものがいいとか、保険証や定期券などカード類をまとめて入れられると便利だとか、具体的な案が次々に出る。アクセサリなどの小物も楽しいしね。自分たちの生活の一助になると、なおさら張り合いが出るのでは、というのがこの日の結論になった。

聞きたいことは山ほどあった。仮設住まいの人たちの生活ぶり、介護の問題で困っていること、カーテン生地でバッグを作って送ってくれた別のグループ、いろいろな分野で活動している女性たちのこと……。

次の機会にまた、話し合えましょうと、大内さんに福島駅まで送ってもらい、実りの多かった一日を終えた。「花見山を守る会」のみなさま お忙しい中をありがとうございました。

にほんごの会 会員 杉田志津子